

第2回奈良県総合教育会議 ー議事録概要ー

日時：平成27年9月4日

場所：奈良県庁5階 第一会議室

(1) 奈良県教育振興大綱策定の進め方(案)について

<資料1について説明>

- 進め方について説明：奈良県教育振興大綱策定の進め方(案)について、今年度の4月から7月にかけて、エビデンスを重視するという一方で、現状分析を進めながら、課題の抽出、検討を進めてきた。5月には第1回総合教育会議を開き、また7月には市町村を交えて教育サミットを開催し、情報や教育課題の共有を図ってきたところである。今回においては、追加的な課題も含めて課題の整理を行い、奈良県教育振興大綱目次(素案)を示した。
- 奈良県教育振興大綱目次(素案)について説明：
 - 1の「教育の現状・将来分析と課題」については、人口減少社会と言われている中、教育需要がどうなっていくかをしっかり捉えた上で、それを踏まえた教育のあり方を考えていく必要があると考えている。また、量的な面だけではなく、質的な面で、教育に対する社会の要請、少子化やグローバル化、子どもの貧困など様々な課題がある。それもしっかり捉えた上で、それに対応してどのような教育ができるかということを議論していく。さらに、奈良県における教育の実情も踏まえてどのような対応を図っていくかという観点で、現状・将来分析をして課題を抽出するのが、まず大綱目次の1番目である。
 - 2は「理念と基本目標」である。「どのような人を育てる」ことを目的とするのか、「育人」という観点から、教育のあり方を求めていく必要があると考えている。その上で教育の質なり、環境整備をどのようにしていくのかということ

議論していきたい。

- さらに、その成果目標を設定していくことが大切である。また、P D C Aサイクルを回していくというのが教育分野においても必要なことだと考えている。
- 3の「今後の施策の方向性」は個別課題。(1)の「奈良県における教育体制のあり方」が、あえて申し上げた学校段階別の縦軸的な捉え方だとすると、(2)の「奈良県における教育課題への対応」は課題ごとの横軸というような捉え方である。(3)の「『育人』を支える教育の質の確保・向上に向けて」は、施設等の環境整備ということで、耐震化を含めて学校の安全確保あるいは芝生化の与える影響、これは好影響とか、今後どうしていくかということである。また、食育の観点から給食体制をどのように整えていくかということも含めて、網羅的に議論させていただければと思っている。

<資料1に関する議長及び各委員からの意見>

- 大変うまくまとめていただいた。特に奈良の場合は、山間へき地と市部・町村部がある。そのことを整理した教育体系をつくる必要がある。
- 就学前教育と家庭教育は奈良県にとって重要である。大綱には、専門家から意見をいただき、就学前教育と家庭教育を特に大切にすることが必要である。
- アジアと奈良の関係は、現在も当然国際教育の中で重要だが、過去の歴史の中で奈良とアジアは密接な関係を築いてきた。現在の国際化の流れもさることながら、日本のスタートの地としての国際的な意識を大切にすることも、奈良の特徴の一つになる。
- 「鉄は熱いうちに打て」という言葉がある。子どもに一番大切なときに教えてあげられることが非常に大事である。
- 奈良の素晴らしい郷土芸能や郷土に伝わる様々ないわれを、きちんと系統立てて学ぶ機会が必要である。

- 奈良県として、奈良県の教育はどのような人間を育てていくかという理念をまず固めることが大切である。そのためにどういうことをするのか。P D C Aサイクルを活用していくことで具体化できる。
- 奈良県の歴史の中の偉人について勉強すれば、人間の生き様についてもわかってくる。
- 教育の一大転換期が今来ている。県が自ら教育のあり方を考えていくということとは、非常に大事だ。これから先、50年、100年という大きなスパンで捉えられる教育大綱になるような項目が、縦軸と横軸の中で網羅されている。
- 目次の概略案は大綱の骨格というようなイメージが出ている。大綱の骨格は、追加・修正もあるが、今日の意見を踏まえて、この骨格の体系で議論を進めていく。
- 奈良県の現場を離れた教育目標、現状分析はない。現場の教育課題に乗った理念と、その解決の糸口になり、目標になる理念が望ましい。
- それぞれの人が生きる力を与えるという目標もある。今の言葉では実学教育ということになる。
- その施策の方向性として、教育体制、縦軸の課題と、横軸の教育課題と、最後にそれを支える人と環境というように整理されているので、そのように意識をしてこの目次、大綱の骨格を理解した。
- 女性に輝く生涯を送ってもらうための女子教育も必要である。女性が輝けるようにするという女性活躍促進法ができた。それを受けて、教育をどうするかというのは新しい課題である。
- 国際化教育でのコミュニケーションは、言葉よりも、実は異なる価値観への理解力というようなものが本質的にあると思う。いじめで異端を排斥する生徒や学校には、国際理解は絶対にできない。日本人同士でも異端扱いする。外国の人だと更にとということなので、異端を理解する、多様性を理解する国際化教育が必要

である。

<資料2の説明は省略>

(2) 奈良県教育振興大綱策定にかかる外部有識者の選定(案)について

<資料3について説明>

- 顧問を務めていただいている理化学研究所の松本理事長をはじめ、ここに書かれている板東久美子消費者庁長官や、高見茂教授、本田恵子教授、沖田行司教授といった5人の方々に、総論について大所高所からの指導、ご助言をいただきたい。外部有識者の選定の考え方として、総論、各論ともに顧問、教育アドバイザーの5人の方々に大所高所からご指導、ご助言をいただくという形で進めたいと思っている。また、各項目については、テーマによっては、複数の方々から、幅広く意見を拝聴するという形をとりたいと思っている。

<資料3に関する議長及び委員等からの意見>

- できるだけ日本の最先端の有識者の教育理念なり、教育理論を聞くようにということで、奈良県の総合教育会議では、知恵の托鉢をする。

<資料4の説明は省略>

(3) 平成27年度奈良県学力・学習状況調査の結果について

<資料5の説明>

- 本県では、小学校4年生と中学校1年生に更なる県独自の分析をするために、本年度調査を実施した。
- まず、学力について、小学校の国語では特に書く能力、書くことが大きく目標

値を下回っている。中学校も、書く能力、書くことに弱点が見られた。

- 算数・数学について、小学校で、活用する力が若干不足している。また、算数への関心・意欲・態度が足りないが、中学校では、概ね全てが目標値を達成している。ただし、若干二極化傾向が見られ、下位層に大きな山ができつつある。
- 学力の高低に関わらず、小学校で学校間の差が非常に大きいことが大きな課題である。中学校になると、格差は少し狭まっている。

小学生と中学生の学力を横軸、縦軸にとると、市部では、相関が0.86と非常に強い。小学校4年生までにしっかり基礎的な学力を付けていることが、中学校での学力にもつながると思われる。

- 次に、質問紙について、各項目で上位20校と下位20校の差について分析した。
- 児童との関係づくりの基本的な姿勢について、「授業中に自分の考えを発表する機会がある」「学校では先生に挨拶をしている」「自分は先生から認められている」の3項目で分析した。
- 教科指導の基本的な姿勢について、「宿題をきちんとしている」「授業でノートをきちんととっている」「授業でわからないことがあれば先生に質問する」の3項目を算数と国語それぞれで分析した。
- 上位20校と下位20校で一番大きな偏差値の開きがあったのは、「学校では先生に挨拶をしている」で、28.7ポイントの差があった。
- 次に、各項目と全体的な項目との関連について分析した。まず、「先生に挨拶をしている」という項目については、規範意識では「学校のきまりを守っている」と「人の役に立つ人間になりたいと思う」、学習意欲では「先生の授業をしっかり聞いている」という項目で高い相関が見られた。
- 「先生から認められている」という項目については、ほとんど全ての項目に非常に強い相関があった。このことから、先生が子どもを認める学級経営というも

のが非常に大切になると思う。

- 「授業中に自分の考えを発表する機会がある」という項目については、学習意欲と強い相関があり、「学校のきまりをまもる」という項目とも相関が見られた。
- 「宿題をきちんとしている」という項目では、学習意欲と相関が見られた。
- これらの9項目について、市町村別にレーダーチャートで表すと、団体によって形や大きさに差が出ている。この9項目は、教員の基本的な姿勢についての指針になるのではないかと考えている。

<資料5に関する議長及び委員等からの意見>

- 先生の姿勢によってこのような差が出たということで、先生の教え方が非常に大事だということを感じた。今後、大綱の中に先生の資質の向上について具体策が出てくれば、将来に向かって効果が期待できる。
- 挨拶や先生が声をかけるということに関しては、大切なことだと思う。学校で、自分が認められれば学校が楽しくなるし、先生の声かけは、学校にも、勉強にも、運動にも、プラスな面がある。
- 挨拶がこんなにも大きく子どもたちの学習効果に表れてくるという結果に驚いた。挨拶は生活の中で基本中の基本である。挨拶ができていないということ、つまり、先生が挨拶をしているかどうかということによって、これだけ子どもが変わってしまうということも明白になった。今後、このことをどのように先生方に分かっていただくかが課題である。
- 規範意識はいつ伸びるのか、「三つ子の魂」と言うが、規範意識も教育によって伸びる、個性差よりも教育差で違いがある。これは教育現場の成績表であり、教育の差で伸びることが前提であるとする、いつ何をすれば伸びるかということを見出すのが我々の大きな役割である。
- 児童生徒の学習意欲はこの時期に伸びたということがわかれば、それはどうし

てか、いい先生と出会ったから等、タイミングはバラバラかもしれないが、ポイントはこの期間であるということを経験付けるような調査があればよい。

- 挨拶に関して、「先生に挨拶している」という調査はあるが、「先生が挨拶しているかどうか」という調査はない。先生が挨拶している学校は、先生に挨拶する傾向も強いということが出る可能性がある。
- 県一斉テストについて、信頼性の高い調査をどのようにするかということを含めて、子どもの声だけではなく、教員の意識を教育委員会も把握する必要がある。
- 県一斉テストや全国学力・学習状況調査の結果を踏まえ、教員が今後どのように行動すべきか等について、しっかり教育委員会として対応していきたい。
- 奈良県は私学教育が旺盛である。私学のデータも入れた奈良県の教育の実力を測る必要がある。
- 有識者だけの教育大綱作成だけではなく、教育現場で声をどのように聞くのか、関係者にどのように聞くのかという課題がある。今後、コメントを求めるタイミングは必ずあると思うが、できるだけ広く、できるだけ深く聞くことができるように、方法やプロセスについても研究する必要があるので、それについても意見を集めたい。
- 奈良県教育の今後の方向性として、奈良県教育振興大綱の策定を目指したい。本日、議論いただいた目次案に沿って、調査、有識者への聞き取り等を進めていきたいと考えている。

(4) 市町村別総合教育会議の進捗状況について（報告）

<資料6参照>

以上